

まえ の はら
前 の 原 遺 跡 IV

2002年 1月

長野県飯田市教育委員会

まえ の はら
前 の 原 遺 跡 IV

2002年 1月

長野県飯田市教育委員会



飯田市竜丘地区全景
(平成4年11月撮影 S=1/12,500)

序

飯田市は「人も自然も美しく、輝くまち飯田—環境文化都市」として基本計画に示すとおり、山紫水明の自然環境に恵まれ、原始古代より多くの人々が生活を営んできた地域であります。しかし、この飯田市においても地域社会の発展のため現在まで埋蔵されていた埋蔵文化財に開発工事の手をつけざるを得ない事態が生じてきております。本来ならば過去から現在まで保存されてきたのと同様に地中に保存していくのが最善の方法ですが、次善の策として発掘調査を行い記録保存することによって後世に埋蔵文化財を残すのはやむを得ないことと考えております。

今回発掘調査を実施した前の原遺跡は、飯田市竜丘地区に所在し、この遺跡内に飯田市生涯学習センター（竜丘公民館・支所）を新築するという事で発掘調査を行いました。この調査により、縄文時代から平安時代までの住居址が発見され、長い間に亘る集落の跡であることが確認されました。この調査結果から、当時の人々の暮らしぶりを垣間見た気が致します。このように、これらの発掘調査の積み重ねによって地域の歴史の再構築が行われ、ひいてはその成果が私たちの生活に還元されていくものであります。

最後になりましたが、飯田市関係部局には調査実施にあたり文化財保護の本旨に厚い御理解を賜りました。また、地元の皆様、現地・整理作業に従事された作業員の皆様に深甚なる謝意を申し上げます。

平成14年 1 月

飯田市教育委員会

教育長 富 田 泰 啓

例 言

1. 本報告書は平成12年度飯田市生涯学習センター（竜丘公民館・支所）建設事業に伴い実施された、飯田市竜丘地区所在の埋蔵文化財包蔵地前の原遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は飯田市教育委員会が直営で行った。
3. 調査は、平成12年度現地作業を、13年度整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 発掘調査及び整理作業は、KMH503を用いた。また、遺構には次の記号を用いた。
 竪穴住居址・SB 土坑・SK
5. 本遺跡は、昭和46年に長野県飯田高等学校考古学班による学術調査が（1次調査）、昭和49年度構造改善事業に伴い2次調査が、昭和63年度飯田市竜丘保育園移転新築工事に伴い3次調査がそれぞれ行われているので今次調査は4次調査として扱う。よって遺構番号は過去の調査の連番とした。
6. 前の原遺跡における発掘調査位置は国土基本図の区画、Ⅷ-LC-94-4に位置し（社団法人日本測量協会 1969「国土基本図図式 同適用規定」参照）、グリッド設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、（株）ジャステックに委託した。
7. 本書の記載については遺構の順とし、遺構図・遺物図版・写真図版は本文末に一括した。
8. 表中の出土遺物記述に於いて、平安時代の土器で器種のみものは土師器を示す。
9. 土層観察については 小山正忠・竹原秀男 1996『新版標準土色帖』により、粘性・しまりについては4段階で示してある。
 ◎かなりあり・○あり・△あまりなし・×なし
10. 遺物実測図の縮尺については、下記のとおりである。
 土器 復元実測図1/4・拓本及び断面1/3
 石器 1/3
11. 遺物実測図中の記号は下記のとおりである。
 土器断面黒塗……須恵器
 石器実測図中スクリーントーン……ガジリ痕
12. 本書は吉川金利が執筆・編集し、小林正春が総括した。
13. 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館及び飯田市上郷考古博物館で保管している。

目次

本文目次

序

例言

目次

I 調査経過

1. 調査に至るまでの経過…………… 1
2. 調査の経過…………… 1
3. 調査組織
- (1)調査団…………… 1
- (2)事務局…………… 2

II 遺跡環境

1. 自然環境…………… 3
2. 歴史環境…………… 4

III 調査結果

1. 基本層序…………… 7
2. 遺構
- (1)竪穴住居址 (SB)
- ①SB31…………… 7
- ②SB32…………… 8
- ③SB33…………… 8
- ④SB34…………… 8
- ⑤SB35…………… 9
- (2)土坑 (SK)
- ①SK21…………… 9
- ②SK22…………… 9
- ③SK23…………… 9
- (3)ピット…………… 9

IV 総括

1. 縄文時代……………11
2. 平安時代……………11

引用参考文献……………12

図版目次

- 第1図 遺跡位置図……………15
- 第2図 1次～4次調査位置図……………15
- 第3図 周辺遺跡位置図……………17
- 第4図 基本層序・SB31……………18
- 第5図 SB32・33・34・35……………19
- 第6図 SK21・22・23、ピット(1)……………20
- 第7図 ピット(2)……………21
- 第8図 ピット(3)……………22
- 第9図 遺構分布図……………23・24
- 第10図 SB31出土遺物……………25
- 第11図 SB31・SB32・SK21・遺構外出土遺物……………26
- 第12図 遺構外出土遺物……………27
- 第13図 遺構外出土遺物……………28

写真図版目次

- 図版1 調査区全景……………31
- 図版2 調査前・調査区全景……………32
- 図版3 SB31・同竈・同P1遺物出土状況……………33
- 図版4 SB32・SB33……………34
- 図版5 SB34・SB35……………35
- 図版6 調査スナップ・調査スタッフ……………36
- 図版7 委託作業スナップ……………37
- 報告書抄録……………38

Ⅰ 調査の経過

1. 調査に至るまでの経過

飯田市では竜丘地区に教育文化施設建設の計画が策定された。それに基づき平成5年度に竜丘地区で建設推進委員会を設置し、そこで建設地を検討し、当該地に決定された。文化財保護担当側では過去3度の発掘調査により判明した本遺跡の重要性から、本来ならば埋蔵文化財保護の観点から見れば現状保存が望ましいと要求したが、協議の結果、他の建設候補地がない等の理由で計画変更は不可能であるとの結論に達した。よって次善の策ではあるが、発掘調査を行い記録保存することとなった。

平成12年4月20日付で飯田市教育委員会生涯学習課から「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」が提出された。よって同月24・25日に地下の状況を把握すべく、影響が及ぶ建物建設部分にトレンチを設定し試掘調査を行った。結果、南東側で縄文中期中葉期と思われる竪穴住居址が確認されたため、試掘調査結果に基づいて本調査区を設定した。

2. 調査の経過

前述の試掘調査を踏まえて、平成12年5月10日から重機により表土剥ぎを行い、翌日より作業員による遺構検出作業並びに(株)ジャステックによる基準点測量を行った。本調査地区はナガイモ畑であったらしく、深い溝状の攪乱がかなりあり、攪乱除去も並行して行ったため、遺構数に比して調査日数がかかった。5月25日に空中写真撮影・機材撤収を行い、現場での一切の調査を終了した。

平成13年度に整理作業・報告書作成作業を行い本報告書の刊行となった。

3. 調査組織

(1) 調査団

調査主体者	飯田市教育委員会	教育長	富田 泰啓		
調査担当者	吉川 金利	澁谷恵美子	下平 博行		
	佐々木嘉和	藤原 直人	馬場 保之	伊藤 尚志	福澤 好晃
	坂井 勇雄	羽生 俊郎			
	新井 幸子	池田 幸子	木下 貞子	木下 義男	木下 力弥
	小林 定雄	小林 千枝	下田美美子	関島真由美	高橋セキ子
	橘 千賀子	田中 博人	塚原 次郎	中島 俊明	中田 恵
	仲村 信	中山 敏子	林 員子	久田きぬゑ	平栗 陽子
	牧内 修	牧内喜久子	森山 律子	吉川 悦子	

(2) 事務局

飯田市教育委員会

教育長 富田 泰啓

教育次長 久保田裕久

博物館課 (～平成12年度)

生涯学習課 (平成13年度～)

米山 照美 (博物館課 課長)

中 島 修 (生涯学習課 課長)

小林 正春 (博物館課 埋蔵文化財係長) (生涯学習課 文化財保護係長)

馬場 保之 (博物館課 埋蔵文化財係) (生涯学習課 文化財保護係)

澁谷恵美子 (〃 〃) (〃 〃)

吉川 金利 (〃 〃) (〃 〃)

伊藤 尚志 (〃 〃) (〃 〃)

下平 博行 (〃 〃) (〃 〃)

福澤 好晃 (〃 〃)

坂井 勇雄 (〃 〃) (〃 〃)

羽生 俊郎 (〃 〃)

今 村 進 (博物館課 庶務係長)

松山登代子 (〃 庶務係)

高 田 清 (学校教育課 総務係長)

宮田 和久 (学校教育課 総務係)

福沢 恵子 (〃 〃)

Ⅱ 遺跡の環境

1. 自然環境

飯田市竜丘地区は、飯田市街地から南に約4～8kmに位置し、飯田市全域から見ればやや南部にあたる。東は天竜川を挟み龍江地区に、北は毛賀沢川で松尾地区と境を接する。南は久米川を挟み川路地区となり、西は高位段丘で伊賀良地区と接する。

伊那谷の基本的な地形は、天竜川の流れに沿ったほぼ南北方向への断層段丘地形を特徴としている。

伊那盆地ができはじめたのは250万年位前からで、天竜川が流れ始めたのもこの頃からと言われる。この頃から60万年前までに南アルプスが隆起をはじめ、竜東側に巨大扇状地ができ、60万年前頃から中央アルプスが隆起をはじめ、伊那谷全体が巨大扇状地で埋め尽くされた。そして、10万年前頃から断層運動が活発となり、中央アルプスの上昇とともに盆地全体も上昇し、断層が多くできた。また、山地の上昇と気候の温暖化により、天竜川やその支流により段丘および扇状地の開析が進行した。伊那谷の生い立ちを知る上で、最も参考になるのが松尾から竜丘を貫く「念通寺断層」である。

竜丘地区では天竜川が東端を南流し、大部分が鷲流峡の狭窄部にあたり、その先の時又付近からは流れをやや西側に変えて、広々とした氾濫原を形成する。平坦部は、氾濫原を含め大きく5から6の段丘面で形成されており、それらは火山灰が被らない低位段丘Ⅱと、被る低位段丘Ⅰとに大別できる。下位の面が沈降した結果、段丘崖直下には湿地が形成される場合が多い。また、伊賀良と接する中位段丘は500m前後のローム層に覆われた台地で、低位段丘Ⅰとの比高差は70mを測り、その境が「念通寺断層」である。各段丘面は毛賀沢川・新川・西沢川・駒沢川・臼井川・久米川といった天竜川の支流により開析され、複雑な小地形を呈している。

前の原遺跡は、桐林地区に所在し、地区全体から見れば東端に位置する。地形的には、中位の段丘面I b 2（桐林面）上にある。周囲は近年宅地等の諸開発の進行が著しいが、本来比較的乾燥地であり、大半が桑園として活用されていた。なお、遺跡の西方は、同一段丘面が連続しているように見えるが、現国道151号付近から西方段丘崖下にかけては大きな湿地帯を成しており、水田地帯が連続している。この湿地帯を主要な生産基盤として立脚した集落のひとつが本遺跡であると言える。

気候面でみれば、飯田市は比較的温和であり、平均気温は13℃を越え、降水量は年間1600mm程度と年間を通して周辺山地より少ない。竜丘地区は飯田市の中でもさらに温暖である。これは、地区の大部分が標高370～440mと低いことが主因であり、また、西側に大きな段丘崖を背負っているため、冬の南西からの卓越風から守られる格好になっていることも要因のひとつにあげられる。こうした温和な気候や起伏に富んだ地形に由来して、飯田市をはじめとして下伊那地域は豊かな動植物相を示している。植物の水平分布から見ると暖地性と温帯性の分布の接点にあたり、植物の種類も2500種に及ぶ植生豊かな地域である。また、飯田市から阿智村・下条村・泰阜村・天竜村に分布するギフチョウは、市内では竜丘・伊賀良・川路・三穂・龍江・千代の各地区に生息しており、平成元年1月31日付で飯田市指定文化財（天然記念物）に指定されたほか、同年4月には地区内桐林を中心とするギフチョウ生息地が環境庁

の「ふるさといきものの里」に指定されている。

2. 歴史環境

竜丘地区の遺跡を概観すると、天竜川氾濫原及び段丘崖を除いてほぼ全域が埋蔵文化財包蔵地であり、殊に、飯田下伊那地方で最も古墳が多く築造されている。竜丘地区での遺跡発掘調査は近年（主に昭和40年代以降）になって増大してきた。これまでに行われた発掘調査のうち、一般国道151号付替えに先立つ鏡塚古墳⑤（以下、古墳及び遺跡名の次の丸数字は第3図「周辺遺跡位置図」の番号と対応する。本遺跡今次調査は①）、内山遺跡⑥、安宅遺跡（1次調査）⑦、県道駄科大瀬木線拡幅改良に先立つ鈴岡城址⑧、安宅遺跡（3次調査）④、市道新設に先立つ開善寺境内遺跡（3次調査）⑨、農業構造改善事業に先立つ小池遺跡⑩、駄科権現堂遺跡（宮城遺跡）⑪、神送塚古墳⑫、本遺跡（2次調査）③、駄科北平遺跡⑬、市立竜丘保育園建設に先立つ本遺跡（3次調査）④、治水対策事業運搬道路建設に先立つ蒜田古墳⑭、塚原遺跡⑮、塚原二子塚古墳⑯、ガンドウ洞遺跡（1次調査）⑰、考古資料館及び集会所建設に先立つ開善寺境内遺跡（1・2次調査）⑱・⑲、民間開発に先立つ安宅遺跡（2・4・5・6次調査）⑳～㉓、上の坊遺跡㉔、蒜田遺跡㉕、ガンドウ洞遺跡（2次調査）⑲、西の塚遺跡㉖、久保尻遺跡㉗、前林遺跡㉘、松ヶ崎遺跡㉙、遠見原遺跡㉚、内山遺跡（2次調査）㉛等の緊急発掘調査がある。一方、わずかではあるが宮洞窯址群④⑥の学術的な調査や長野県飯田高等学校考古学班による本遺跡調査（1次調査）②も行われている。

竜丘地区の歴史を概観すれば、縄文時代以降人々の定住した姿が確認されている。しかし、火山灰が確認される低位段丘Ⅰ（いわゆる「桐林面」・「駄科面」・「長野原面」等）や中位段丘上では、市内他地区の上溝遺跡・八幡原遺跡・猿小場遺跡（松尾）や下の原遺跡（伊賀良）等で旧石器時代の遺物が出土しており、地区内にもこの時代の遺跡がある可能性は高い。

縄文時代前期になると、上の坊遺跡で断片的ながら後葉の土坑や土器・石器が確認されており、氾濫原から20m程の高所での人々の活動が知られるようになる。中期には駄科権現堂遺跡（宮城遺跡）・安宅遺跡・駄科北平遺跡・本遺跡で竪穴住居址等が調査されており、駄科権現堂遺跡（宮城遺跡）では、飯田地方では数少ない藤内Ⅱ式期を主とする集落が調査されている。駄科北平遺跡では中期後葉の住居址が2軒調査され、さらに終末のものと考えられている石棒を伴う配石墓壙がある。また、開善寺境内遺跡において中期中葉から後葉の遺物が出土している。本遺跡では1次・2次調査に於いて中期後葉の集落跡が確認されている。特筆すべきは1号住居址出土土器である。その多くは東海地方の咲畑式系のもので、他の土器型式と比べ比率が異常に高く、当時の交流関係を考える上に於いて興味深い。後期初頭として、駄科権現堂遺跡（宮城遺跡）土坑出土の東海地方の影響を受けた土器が注目される。後・晩期から弥生時代中期にかけては、具体的に生活の様子を物語る資料はほとんどない。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡は、他地域の状況と同様、遺跡数が増加しており、これまで中・高位段丘上での調査事例が主である。安宅遺跡・蒜田遺跡・ガンドウ洞遺跡・鈴岡城址で住居址が調査されている。いままでのところ、低位段丘上での調査例はないが、竜東対岸の龍江地区では治水対策事業に先立つ調査で氾濫原に面した緩斜面で集落の一部が調査されており、今後低位段丘での調査例も増

えると考えられる。また、蒜田遺跡・上の坊遺跡では、貼り石を持つ方形周溝墓が調査されている。蒜田遺跡は方墳と考えられる蒜田古墳と、また、上の坊遺跡は長野県史蹟馬背塚古墳⑳とそれぞれ近接した位置にあり、古墳時代前～後期の地域的な墓制の特徴を解明する上で、注目される遺跡といえる。

竜丘地区には消滅したものを含めると140基の古墳が築造されており、松尾・座光寺地区とともに古墳が集中する地域である。特に、前方後円墳及び帆立形古墳の数が多いたことが際立っており、塚越㉑・権現堂㉒・兼清塚㉓・丸山㉔・大塚㉕・塚原二子塚・金山二子塚㉖・馬背塚・御猿堂㉗の前方後円墳、および塚原3号㉘・鏡塚・鎧塚㉙の帆立形古墳がある。かつて飯田下伊那地方の古墳は横穴式石室を代表として語られることが多かったが、近年では5世紀代の古墳築造開始期のあり方に注目が集まりつつある。権現堂・兼清塚・丸山・大塚・塚原二子塚・塚原3号・鏡塚・鎧塚各古墳は、横穴式石室に先行して竪穴式石室やそれに類する埋葬施設を持つ5世紀から6世紀初頭の古墳と考えられている。そして、当地方の5及び6世紀の古墳築造の動向は、畿内における大和政権の大古墳築造の動きと通じることが指摘されており、古墳出土の馬具や殉葬馬と絡めて、当地区が馬匹生産で重要な役割を果たしたといわれている。

古墳時代後期の集落址は、本遺跡や安宅遺跡・ガンドウ洞遺跡等わずかな調査例のみであるが、前述の古墳築造の背景として、相当規模の集落が複数あったと考えられる。本遺跡3次調査では、一辺が11mを測る大規模な竪穴住居址が調査されており、出土遺物から居住のための施設と考えられるが、居住者の他と懸隔した性格を物語るものと考えられる。

続く白鳳期には上川路廃寺㉚の存在が古瓦出土から推測されている。また、奈良時代から平安時代にかけて桐林に古瓦・瓦塔破片を出土した前林廃寺㉛、さらに上川路上の坊遺跡で古瓦、桐林宮洞窯址からは埴仏が出土している。古墳築造に引き続いて新たな権力の象徴として寺院の建立がなされ、当地区が重要な位置を占め続けていたことが伺われる。

本遺跡や安宅遺跡では、これまでに奈良・平安時代の集落址の一画が調査されている。本遺跡3次調査の場合、時期及び性格の把握が困難であったが、9×2間の身舎に3面に庇を持つ総柱建物址と、これに接して2列に並んだ柱列址が検出されている。古墳時代以降、竜丘地区が当地域の主要な位置を占めていたことをさらに裏付けるものといえる。また、高位段丘の縁の駒沢川に面した部分では、良質な粘土と湧水に恵まれ、陽当たりの良い緩斜面を利用して宮洞・河内ヶ洞といった須恵器の窯址群や堤洞瓦窯址が集中している。

古代東山道の経路についてはいくつかの推定路線がそれぞれの研究者により示されている。座光寺地区の恒川遺跡が伊那郡衙址であり、また、松尾地区の久井遺跡は大規模建物址が調査され、古代官衙関連の遺跡と推測される。また、安宅遺跡も規則的に配列された掘立柱建物址・柱列址があり、かつ灰釉陶器の転用硯が出土しているなど、一般集落とは考えがたい。このように、古墳時代の主要古墳の分布状況と、前述の律令期寺院址及び官衙的遺跡の分布状況を勘案すれば、竜丘・松尾・座光寺を東山道が通過したとする説が有力と言える。

平安時代の末期には、文書に伊賀良庄の名が登場し、地区内の一部が伊賀良庄に含まれている。鎌倉時代末には鎌倉・京都で禅宗が流行したことを受けて、地区内に名利開善寺が開かれ、寺伝によれば建武2（1335）年領主小笠原貞宗が京都建仁寺より清拙正澄を招請して創建されたとも、また、貞和2（1346）年7月19日の三浦和田文書によれば、地頭江馬氏が寺領として中村・河路両郷を寄進し、大鑑

清拙を開山として禅刹開善寺を創建したともいわれている。同寺所蔵の重要文化財「絹本着色八相涅槃図」は時の五山文化そのものを直に受け入れたことを物語っている。応永34（1427）年十刹に列せられたが、明応8（1499）年に火災に遭い山門を除いて焼失し、衰微した。その後、天正10（1582）年織田信長の信濃侵攻に際し兵火を受け、元禄11（1568）年頃にはほぼ現在の寺観に復している。山門は重要文化財、鐘楼は重要美術品となっている。

地区の北端には、南北朝期に小笠原貞宗の次子宗政により、毛賀沢川に面して鈴岡城が築城され、対岸の松尾城とともに小笠原一族の居城であった。しかし、信濃国守護職を松尾小笠原と争い急速に勢力が衰え、天正10（1582）年織田信長の信濃侵攻により滅亡した。駄科北平遺跡では中世堂址と考えられる遺構や四耳壺・青磁・山茶碗・内耳土器・和鏡等遺物が調査されており、鈴岡小笠原氏と深い関わりがあると考えられる。

地区内時又地籍は、天竜川が深く緩やかに流れており、時又港は江戸時代初期より飯田藩の江戸御廻米の舟出港として栄えた。その他煙草・柿等が青谷（静岡県磐田郡竜山村）などに向け送り出された。明治以降、鉄道が開通したことや道路改修が進んで運送馬車が登場して通船は縮小され、竜東や南部山間地への物資の運搬等を中心に繁盛したが、明治40年代以降、橋梁が次々に架けられたり鉄道が延長されたりして、徐々に衰退していった。

竜丘地区は、古代から近代に至るまで飯田下伊那地方の中心地のひとつであったといえよう。

Ⅲ 調査結果

今次調査に於いて検出された遺構は、以下のとおりである。

- ・ 竪穴住居址 (SB) ・ 土坑 (SK) 3基
- 縄文時代 1軒
- 平安時代 1軒
- 不明 3軒

1. 基本層序

調査区の東側で採取した。Ⅰ層である耕土直下がⅡ層のローム層でその上層が遺構検出面となる。よって、漸移層等が見られず、調査区はかなり削平されていると思われる。

2. 遺構

(1) 竪穴式住居址 (SB)

① SB31 (第4図)

検出位置	A I 46	覆土	図版参照
重切	なし	床面	明確で中央部は堅固な貼床
重複	なし	住居内	主柱穴 なし
規模	プラン 長方形	貯蔵穴	P 1
	規模 m 5.4×5.7	入口	なし
	主軸 N 6° W	炉形	形状 石芯粘土竈
形状	壁高 cm 20	規模	cm 111×60
形状	状態 やや緩やか	竈	特記事項
出土遺物 (第10・11図)			
須恵器蓋 須恵器坏 甕 石器は混入品と思われる			
特記事項			
第4図の遺物は床面直上及び底部直上で出土している			
時期	8 C 終末～9 C 初頭	根拠	出土遺物

② SB32 (第5図)

検出位置	A K40	覆土	単層
重切	なし	床面	明確で堅固な貼床
複切られる	なし	住居内施設	主柱穴 P1・P2
埋場所	不明		
規プラン	楕円形	周溝	なし
模規模 m	3.1×3.0		
・主軸	不明	入	口
形壁高 cm	15		
状状態	やや緩やか	炉・竈	形状 不明
		規規模 cm	不明
		特記事項 攪乱に破壊された可能性がある	
出土遺物 (第11図)			
深鉢・浅鉢・横刃型石器			
特記事項			
遺物は覆土中から出土している			
時期	縄文中期中葉	根拠	出土遺物

③ SB33 (第5図)

検出位置	A G39	覆土	単層
重切	なし	床面	不明瞭で軟弱
複切られる	S B34	住居内施設	主柱 不明
埋場所			
規プラン	不明	貯蔵	不明
模規模 m	不明		
・主軸	不明	入	口
形壁高 cm	21		
状状態	ほぼ垂直	炉・竈	形状 不明
		規規模 cm	不明
		特記事項	
出土遺物			
須恵器 土師器 図示できず			
特記事項			
時期	不明	根拠	

④ SB34 (第5図)

検出位置	A H39	覆土	単層
重切	S B33	床面	軟弱であるが貼床あり
複切られる	S B35	住居内施設	主柱 不明
埋場所			
規プラン	不明	貯蔵	不明
模規模 m	不明		
・主軸	不明	入	口
形壁高 cm	20		
状状態	やや緩やか	炉・竈	形状 不明
		規規模 cm	不明
		特記事項	
出土遺物			
縄文土器 図示できず			
特記事項			
時期	不明	根拠	

⑤ SB35 (第5図)

検出位置	A I 39	覆	土	単層			
重切	る	S B 34	床	面	全体に貼床あり		
複切られる	なし	住	主	柱	不明		
規	プラン	不明	貯	蔵	不明		
模	規模	m	不明	入り口	不明		
・	主軸	不明	内	炉	形状	不明	
形	壁高	cm	0	施	規模	cm	不明
状	状態	不明	設	竈	特記事項		
出土遺物							
縄文土器 土師器 図示できず							
特記事項							
時期	不明	根拠					

(2) 土坑 (SK)

No.	図	検出位置	規模(長×短×深)cm	形態	時代・時期	出土遺物	備考
22	6	A O 37	360×168×45	不定形	縄文後期中葉	深鉢 横刃型石器	
23	6	A L 41	196×188×28	円形	不明	なし	
25	6	A O 30	236×140×86	不定形	不明	なし	

(3) ピット

各遺構についての説明は省略する。

IV 総 括

今次調査の結果は以上のとおりである。調査当初は過去の調査成果から縄文時代中期及び古墳時代後期の集落址とそれに伴う遺物の出土が予想されたが、主な成果としては縄文時代中期中葉～後期中葉の遺構・遺物と8世紀末～9世紀初頭の竪穴住居址及び当該遺物が確認された。以下、1次～3次調査の成果も交えて今次調査の総括としたい。

1. 縄文時代

1次・2次調査に於いて中期後葉の集落及び当該遺物が確認されている。遺構の切り合い等、調査結果は疑問点が多々あるが、土器様相から見れば6段階程度の変遷が捉えられる。所謂「細隆線文土器」の出土はなく、中期中葉末～後葉期は存在しない。今次調査で確認されたSB32はその出土遺物から中期中葉、「井戸尻編年」で言う藤内～井戸尻Ⅰ式期の住居址と考えられ、中期後葉の集落は今次調査地点までは展開していないことがわかる。当地方では中期中葉の遺物は散漫的に出土しているが、遺構があまり確認されておらず、集落の様相は不明である。平成13年度に竜丘地区の城陸遺跡に於いて該期の集落が確認された。比較的遺物量も多く、当地方の中期中葉の集落及び土器の様相が解明されるであろう。

他時期に於いては後期中葉と考えられる土器が出土したSK22があるが、同時期の他の遺構がなく該期の集落の様相は不明である。

出土遺物については特筆すべき点はないが、1次・2次調査では東海地域との強い関係を示す土器が大量に出土した。17号住居址では「中富Ⅱ式」系土器が、1号住居址では「咲畑式」系土器が、4号住居址では「神明式」系土器が具体的な数値を示すことはできないが、それぞれ他の土器型式の土器より高い比率で出土している。このことは各遺跡で特徴があり、各遺跡間を総合して考察する必要がある。

2. 平安時代

今次調査に於いてSB31が該当する。2次調査でも同時期の住居址が1軒確認されている（15号住居址）。詳細時期はSB31が8世紀終末～9世紀初頭で、15号住居址が次期の9世紀前半と考えられる。以上のようにある程度継続して集落が存在していたようであるが、過去の調査結果から極めて小規模であったことが窺われる。

該期の出土遺物についてはSB31出土の須恵器坏・蓋、土師器甕があり、遺物量は比較的多い。

以上のような煩雑な総括となってしまったが、今次調査に於いては本遺跡の各時代の集落範囲が臆気

ながらも把握できたように感じられる。2・3次調査に於いて確認された古墳時代後期の集落も今次調査区には及んでおらず、集落の中心は2・3次調査区周辺と考えられる。

最後になりましたが、平安時代の遺物については飯田市誌編纂委員会原始古代史部 奈良・平安時代班の皆様に御教示賜りました。記して感謝申し上げます。

引用参考文献

長野県飯田高等学校考古学班 1974 「飯田市竜丘桐林前ノ原遺跡調査報告」『長野県考古学会誌』17

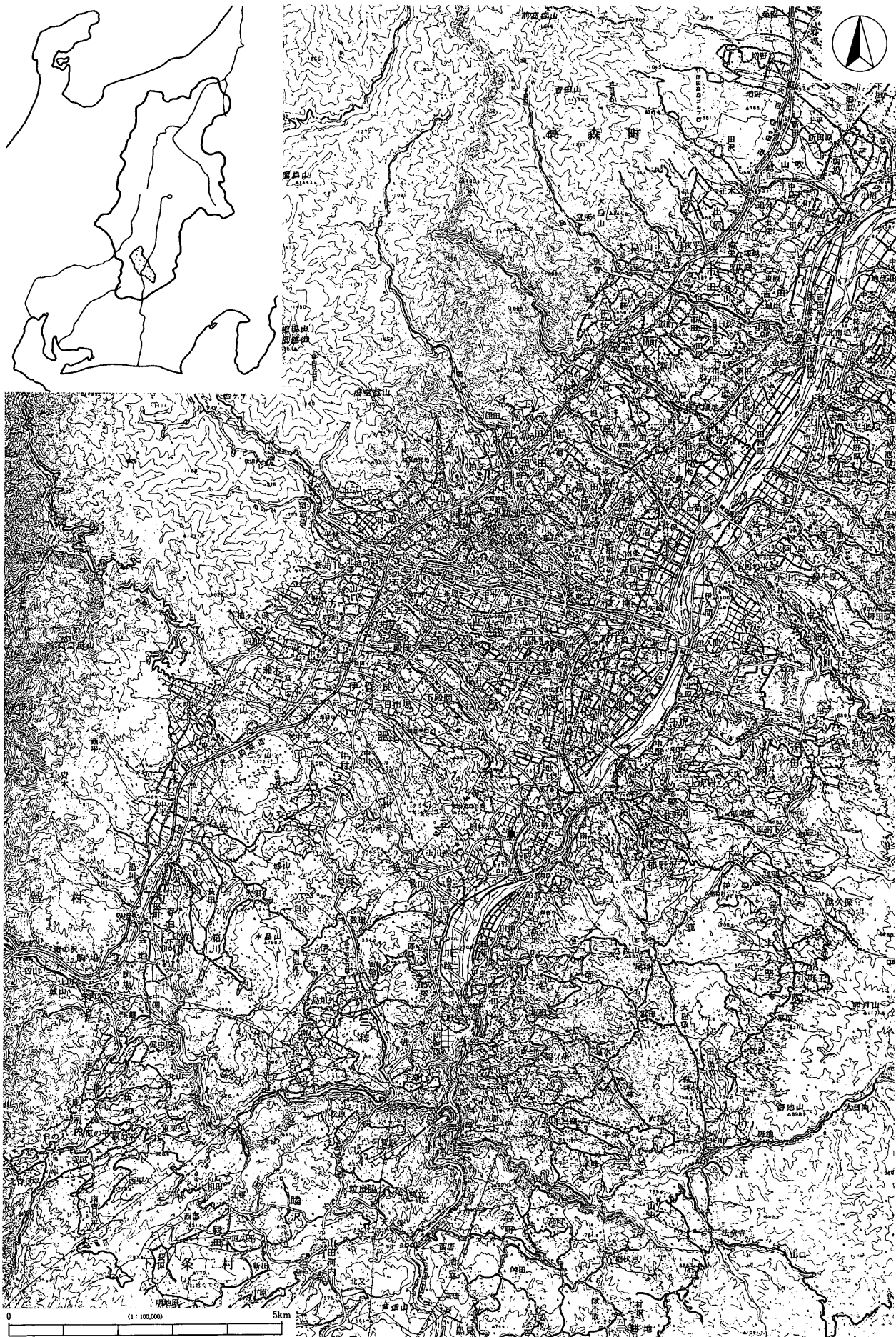
飯田市教育委員会 1975 『前の原・塚原』

飯田市教育委員会 1990 『前の原遺跡』

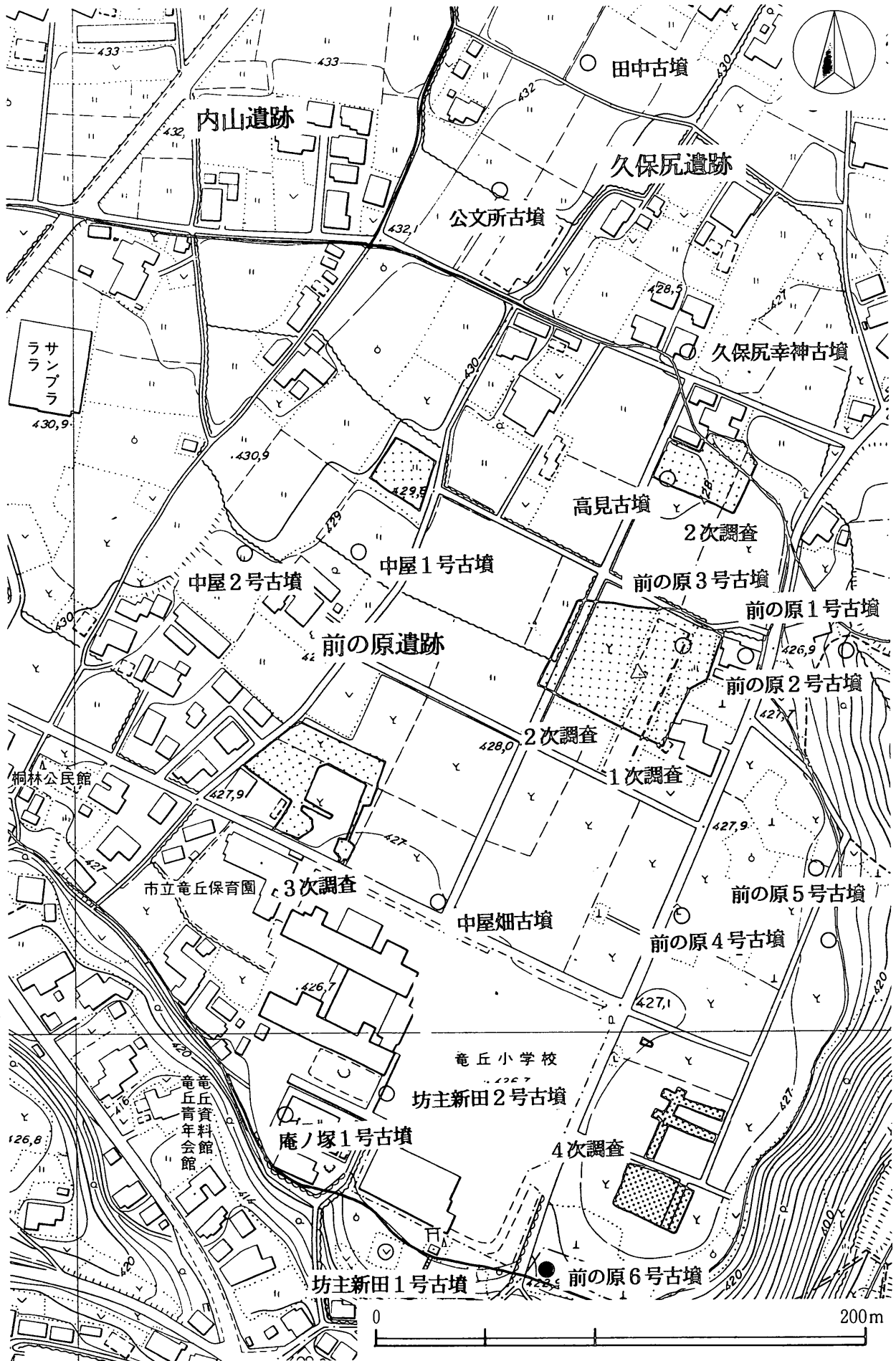
飯田市教育委員会 1995 『安宅遺跡』

飯田市教育委員会 1998 『飯田の遺跡』

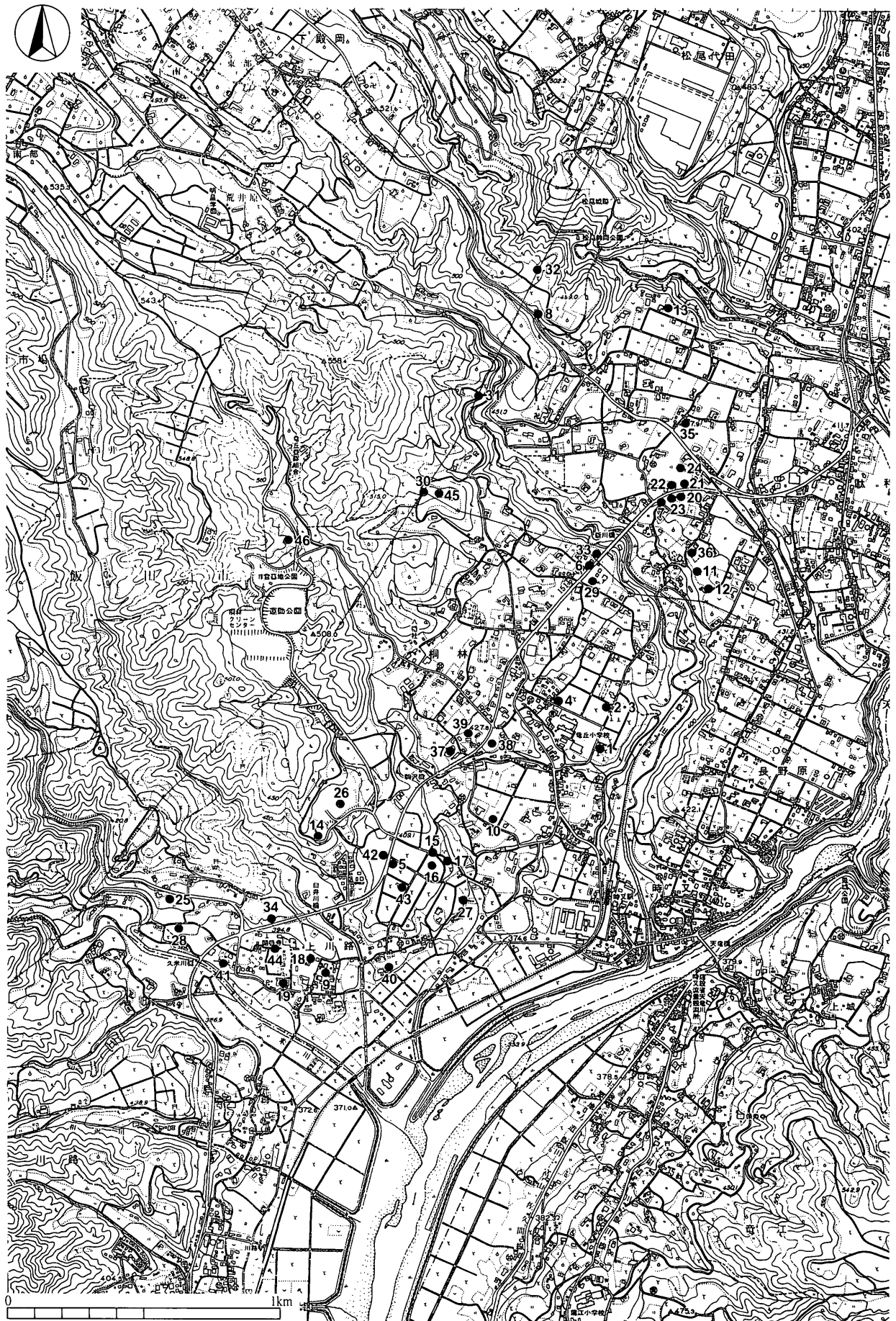
圖 版



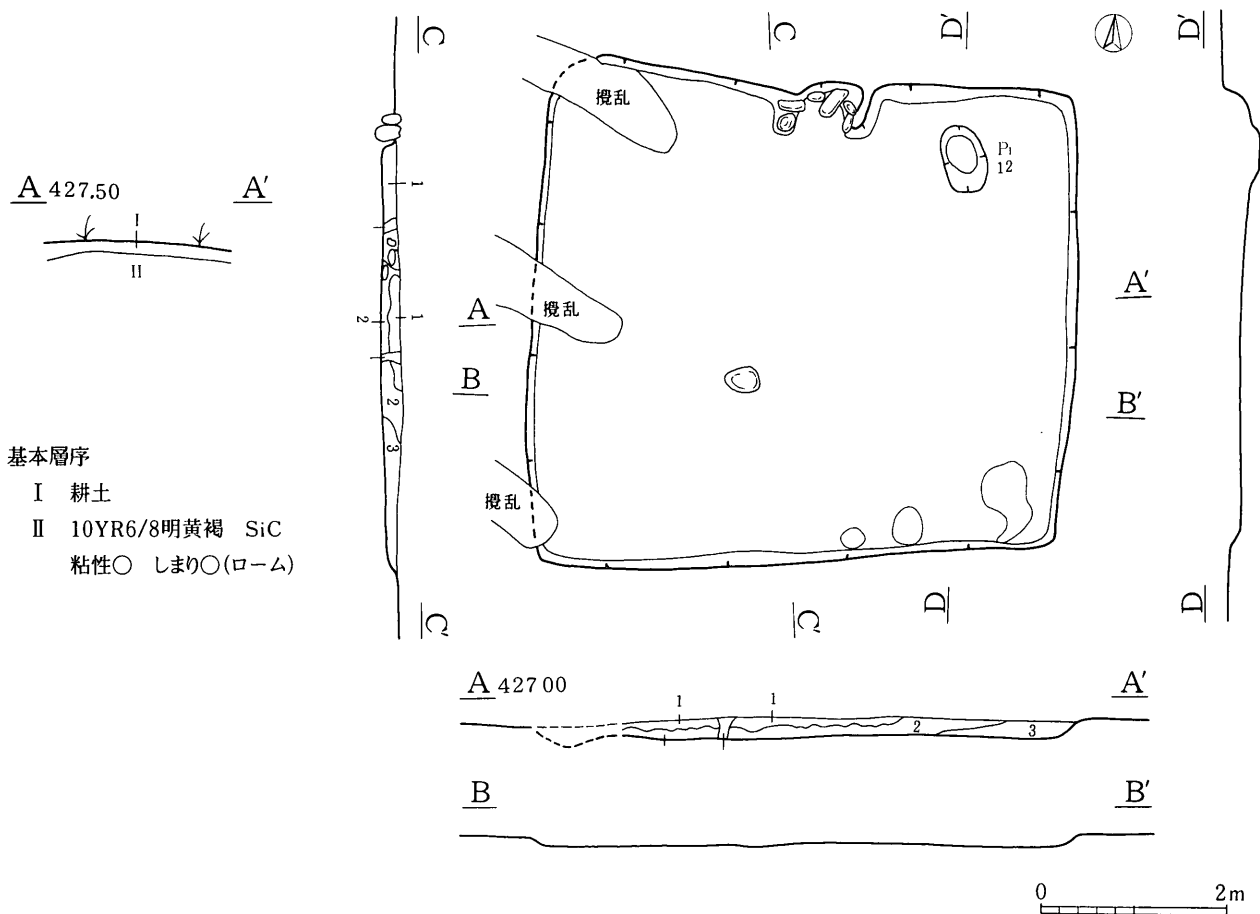
第1図 遺跡位置図



第2図 1次～4次調査位置図



第3図 周辺遺跡位置図

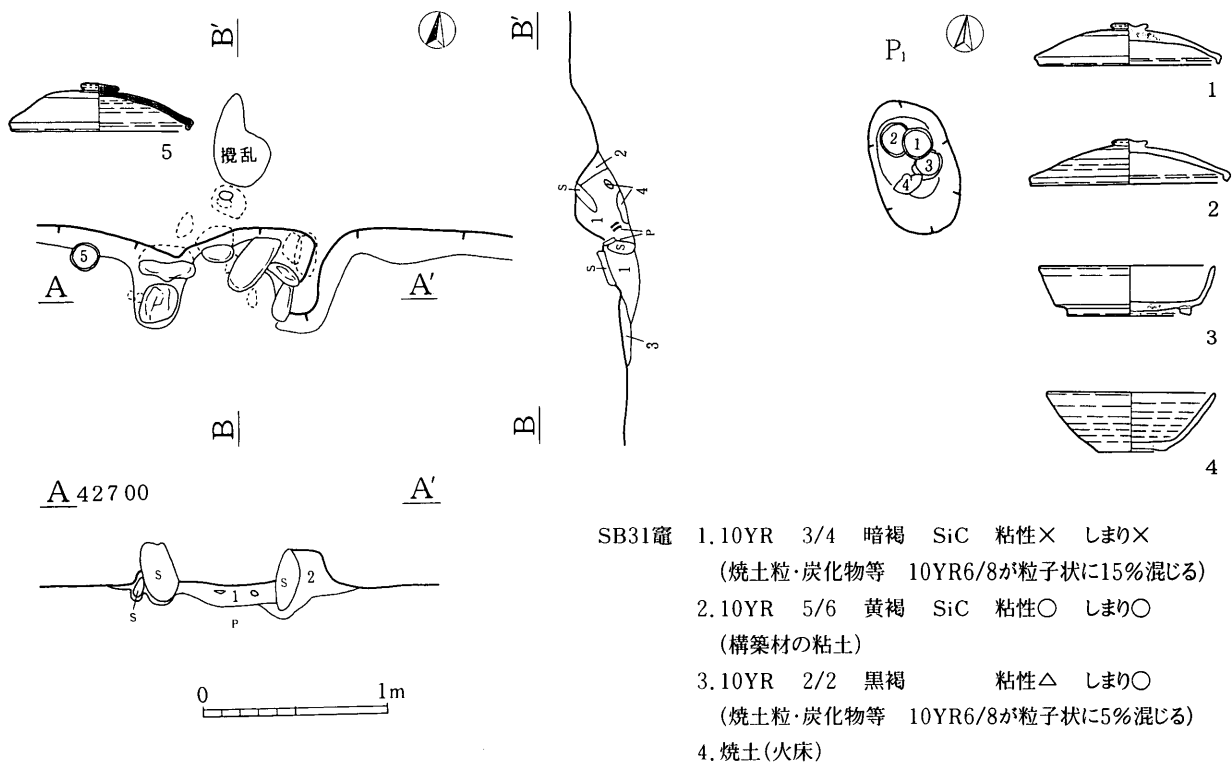


基本層序

I 耕土

II 10YR6/8明黄褐 SiC
粘性○ しまり○(ローム)

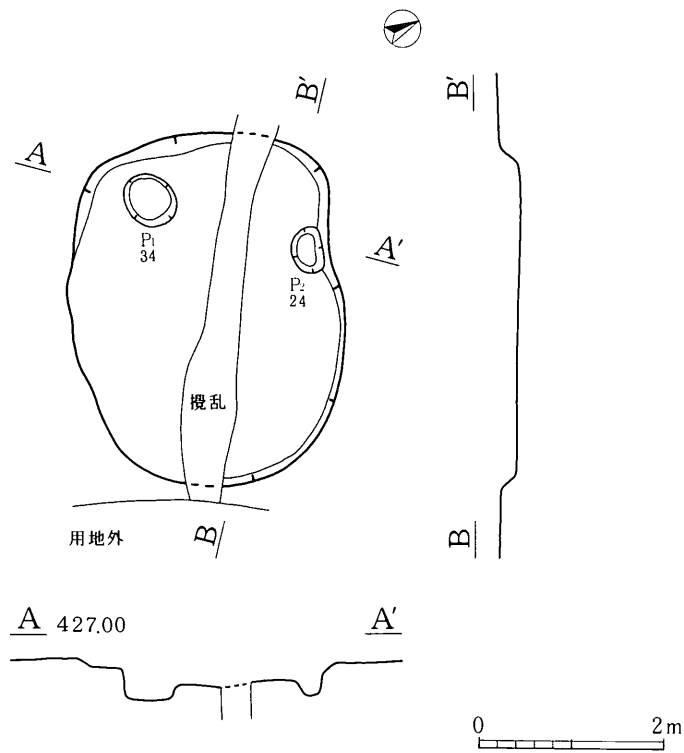
SB31土層 1.10YR 2/1 黒 SiC 粘性△ しまり○
2.10YR 3/2 黒褐 SiC 粘性× しまり×
(10YR6/8 明黄褐がブロック状に20%混じる)
3.7.5YR 5/6 明褐 SiC 粘性○ しまり○



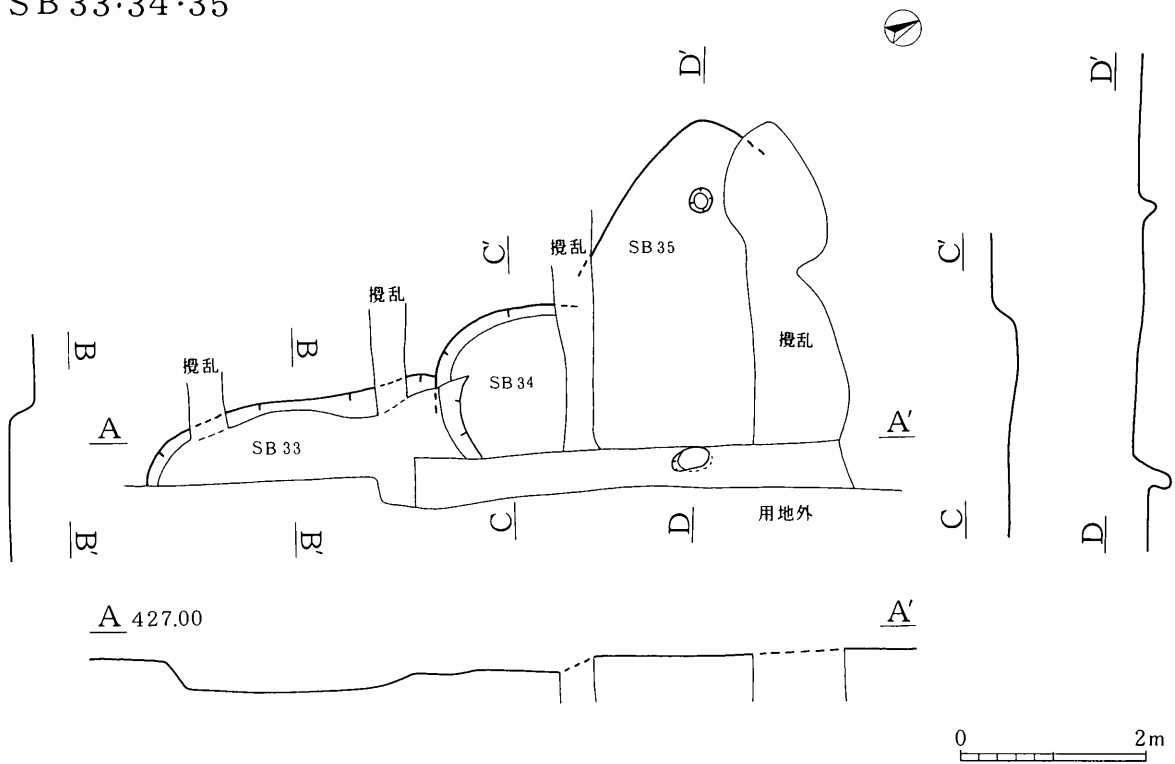
SB31竈 1.10YR 3/4 暗褐 SiC 粘性× しまり×
(焼土粒・炭化物等 10YR6/8が粒子状に15%混じる)
2.10YR 5/6 黄褐 SiC 粘性○ しまり○
(構築材の粘土)
3.10YR 2/2 黒褐 粘性△ しまり○
(焼土粒・炭化物等 10YR6/8が粒子状に5%混じる)
4. 焼土(火床)

第4図 基本層序・SB31

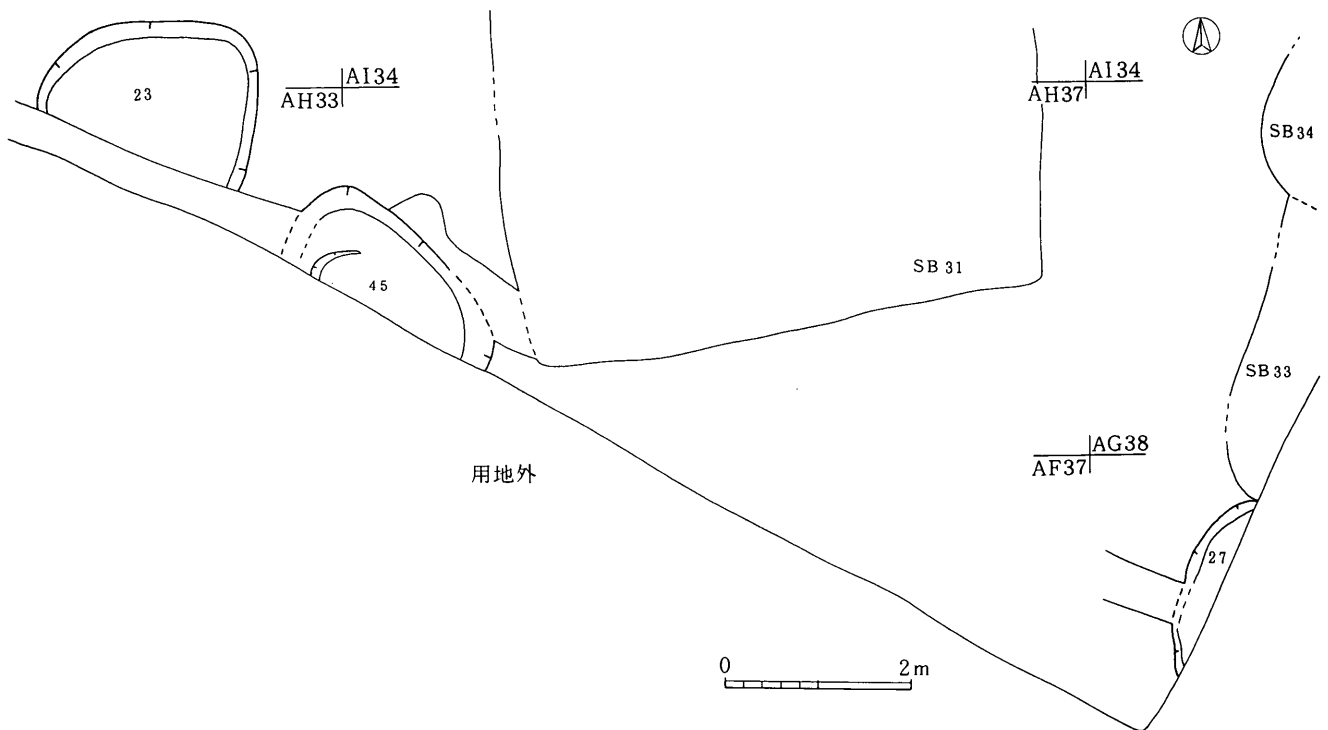
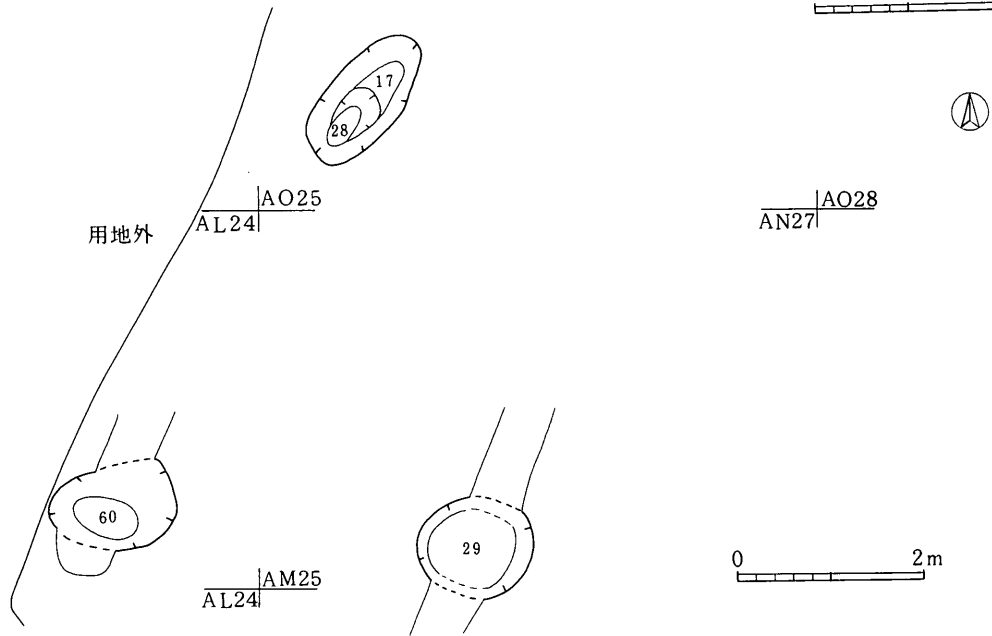
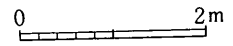
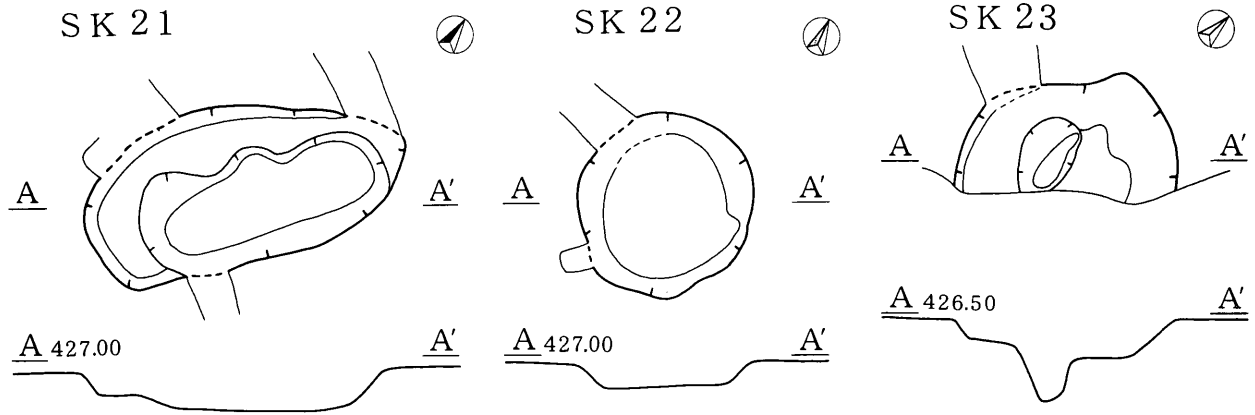
SB 32



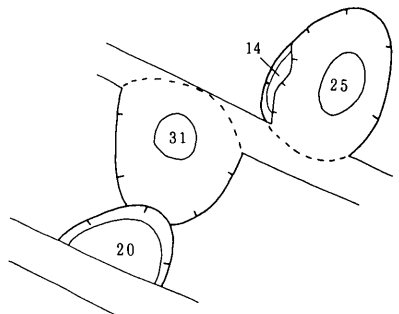
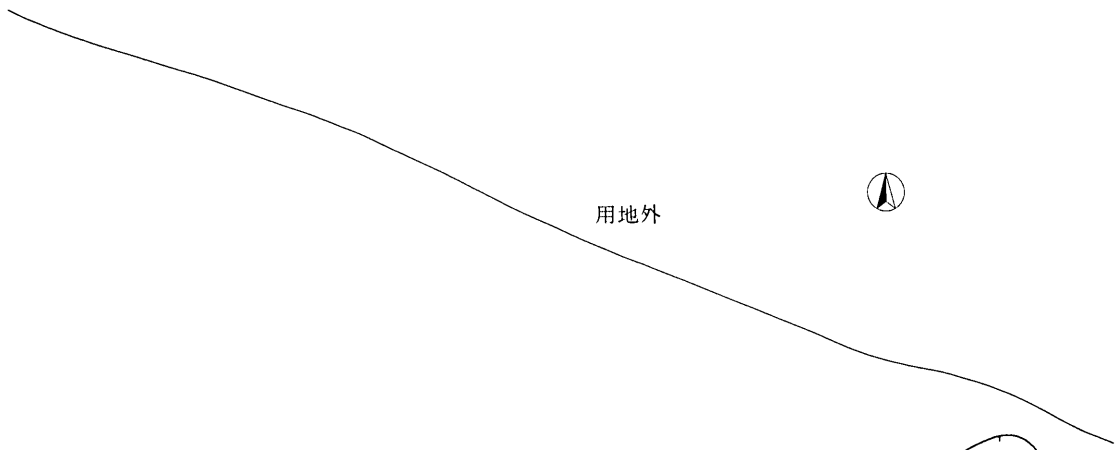
SB 33·34·35



第5図 SB32・33・34・35

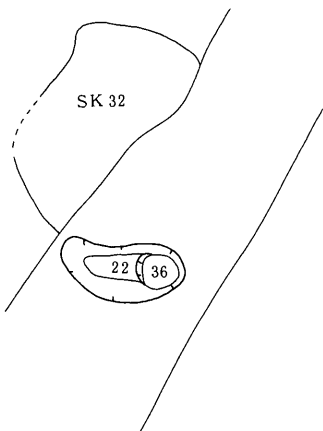


第6図 SK21・22・23, ピット(1)

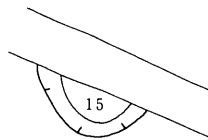


AP30 | AQ31

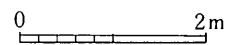
AP34 | AQ35



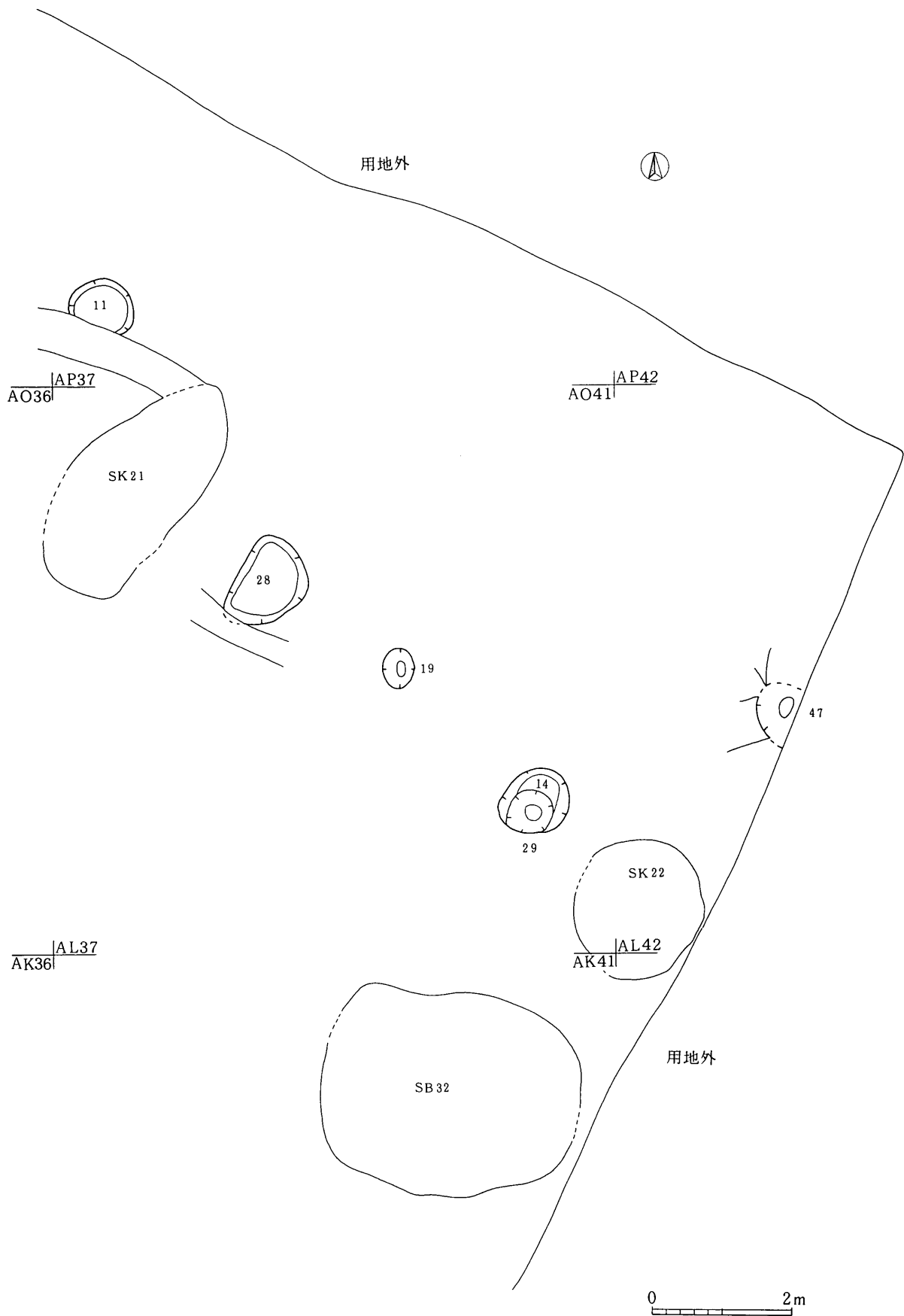
AL30 | AM31



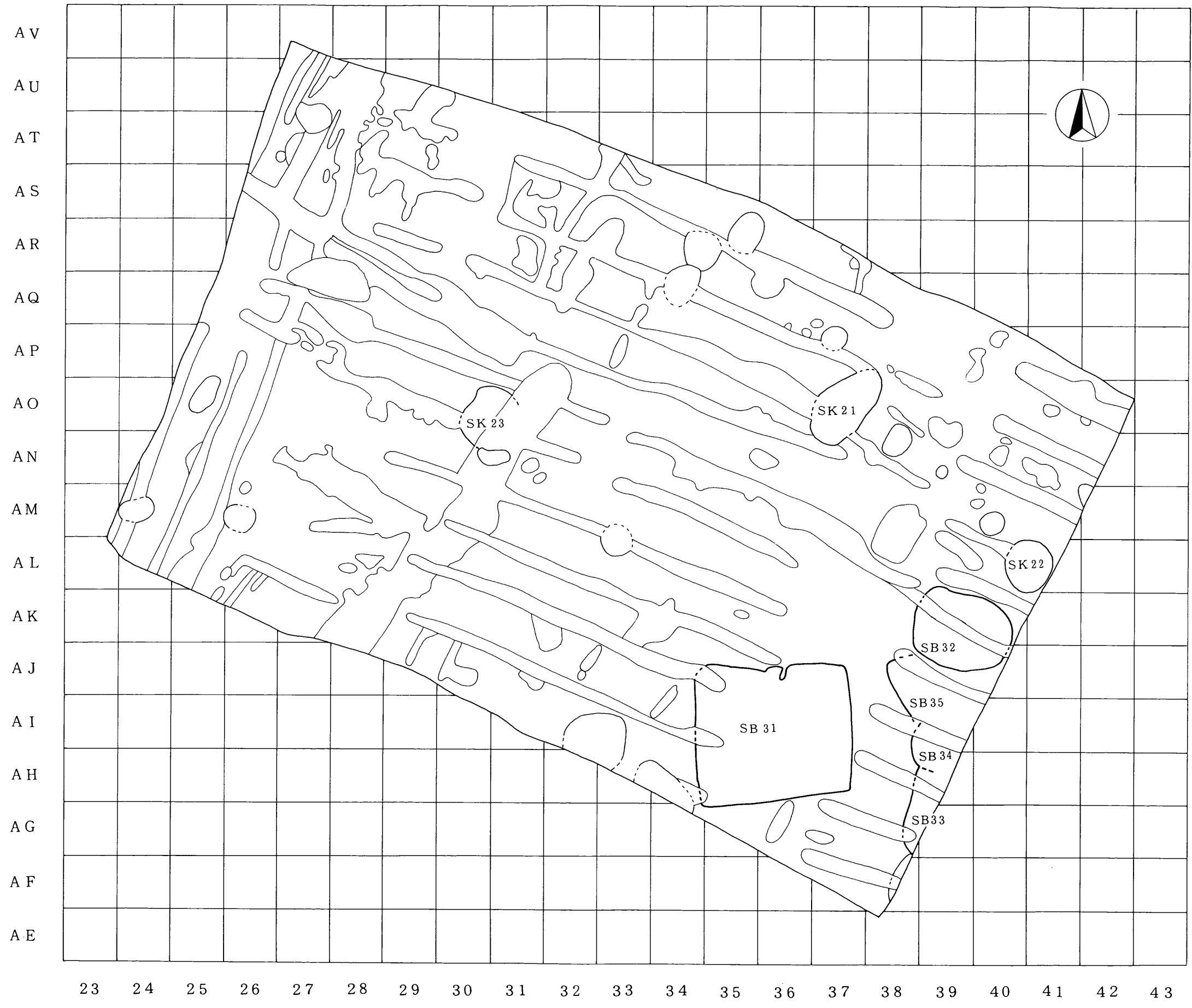
AL34 | AM35



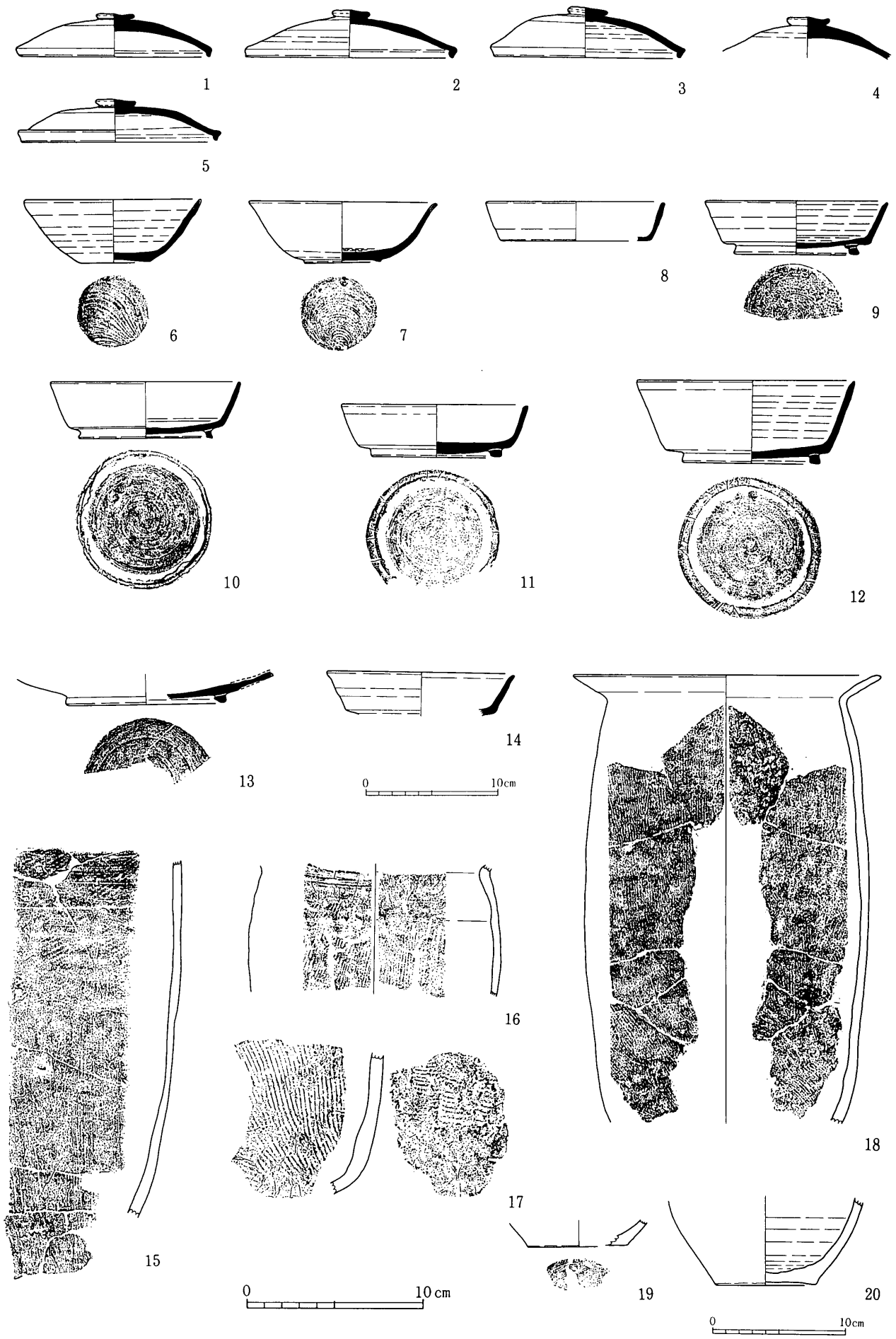
第7図 ピット(2)



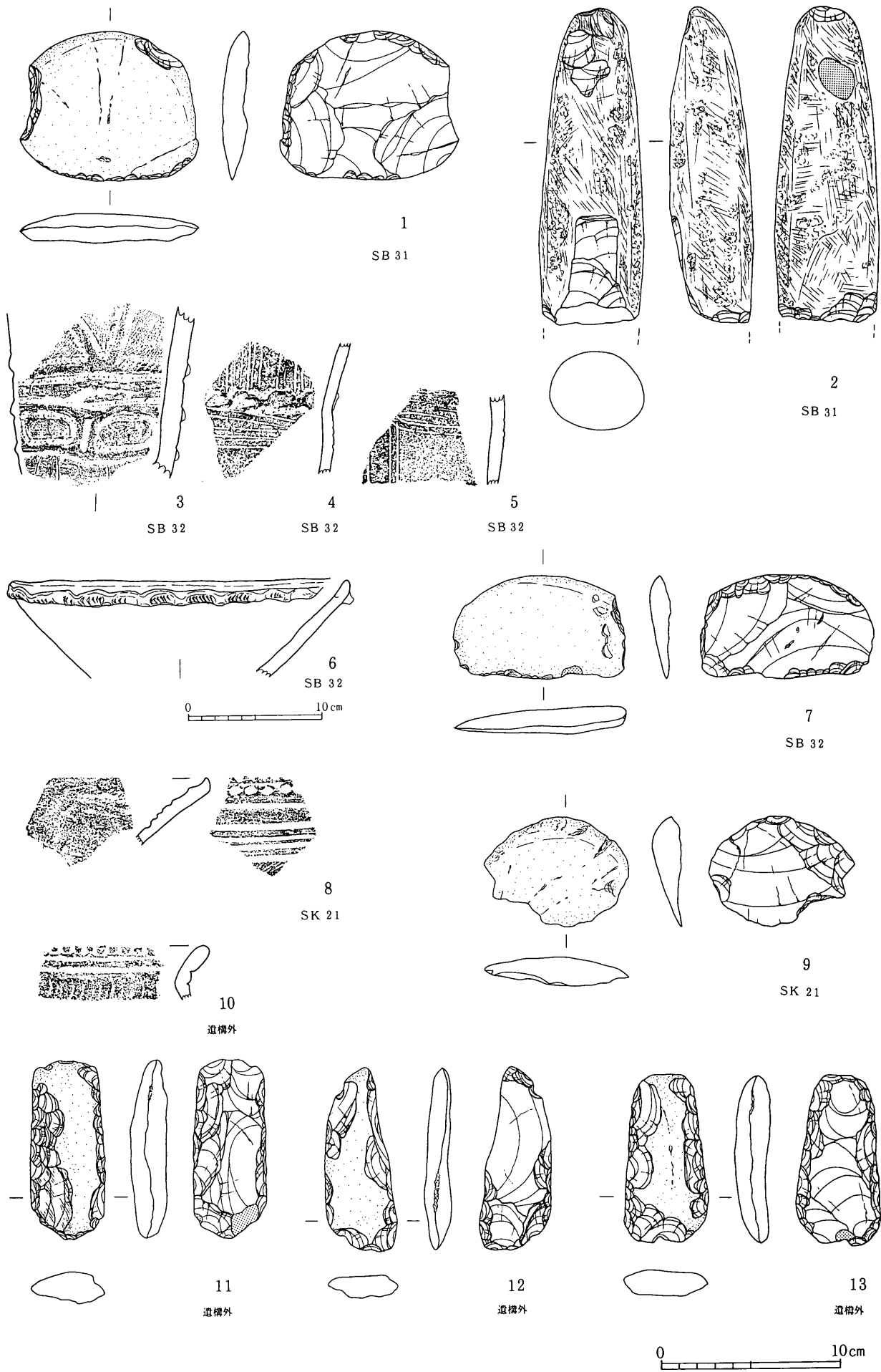
第8図 ピット(3)



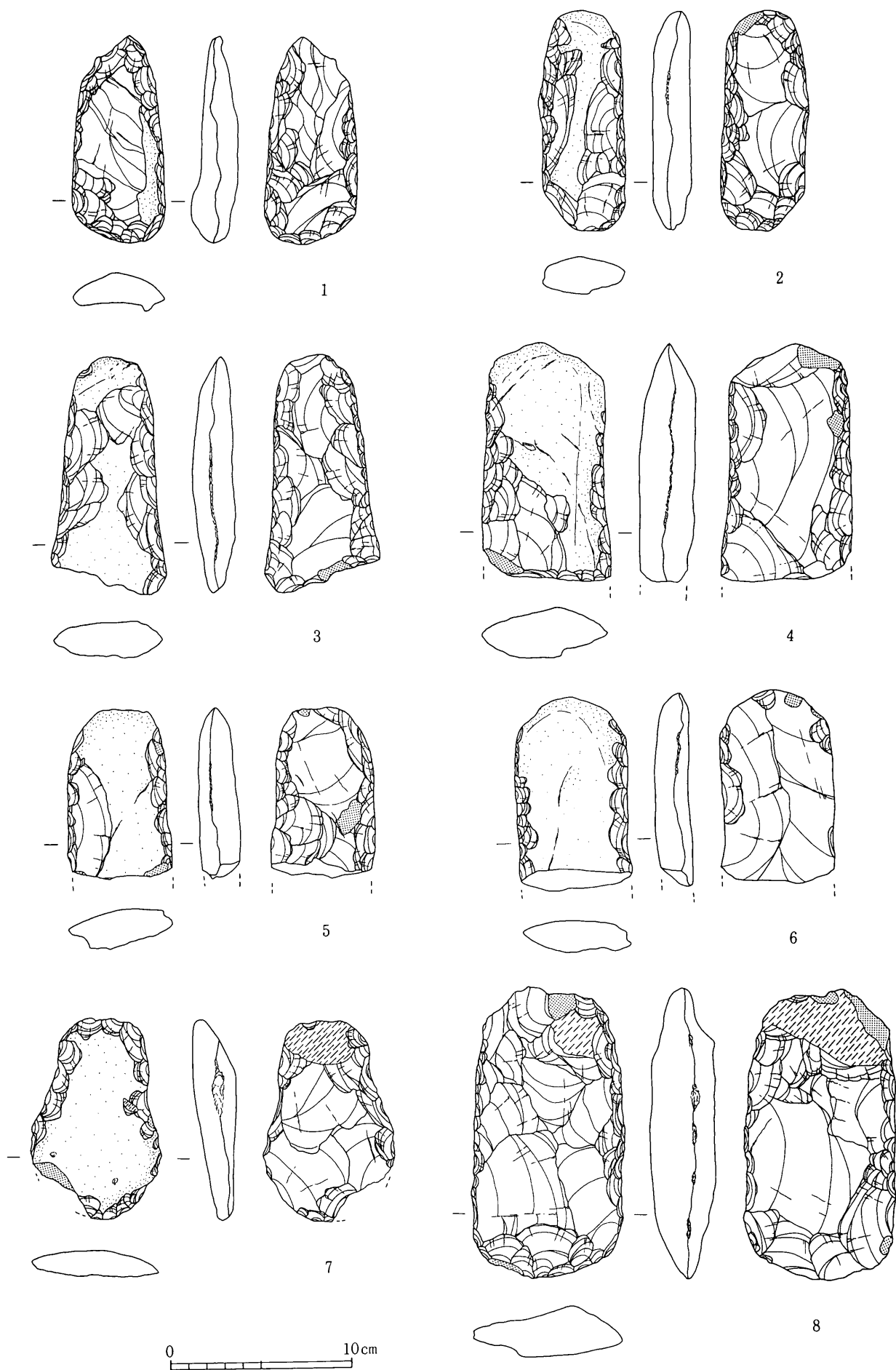
第9図 遺構分布図



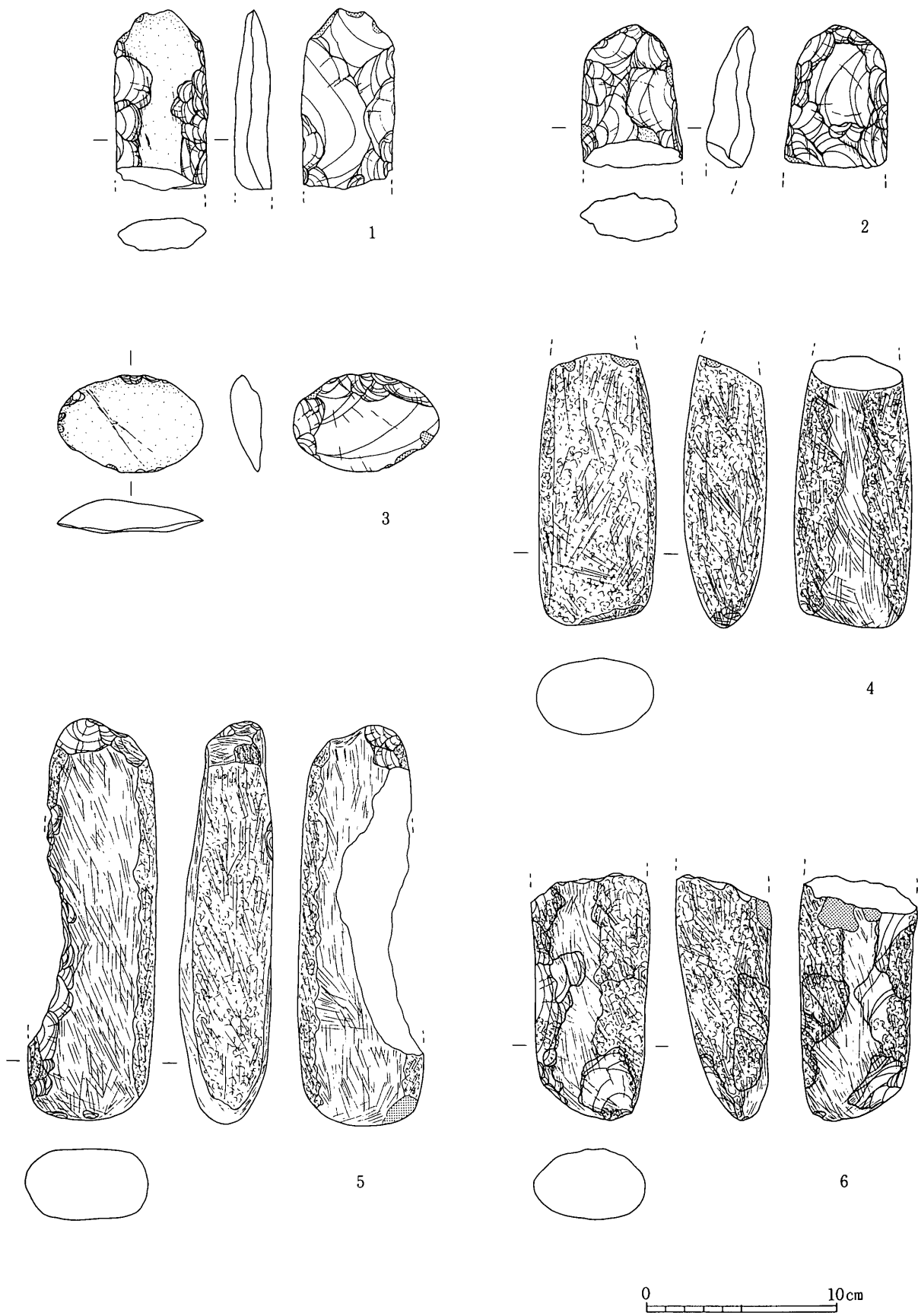
第10図 SB31 出土遺物



第11図 SB31・32・SK21・遺構外出土遺物

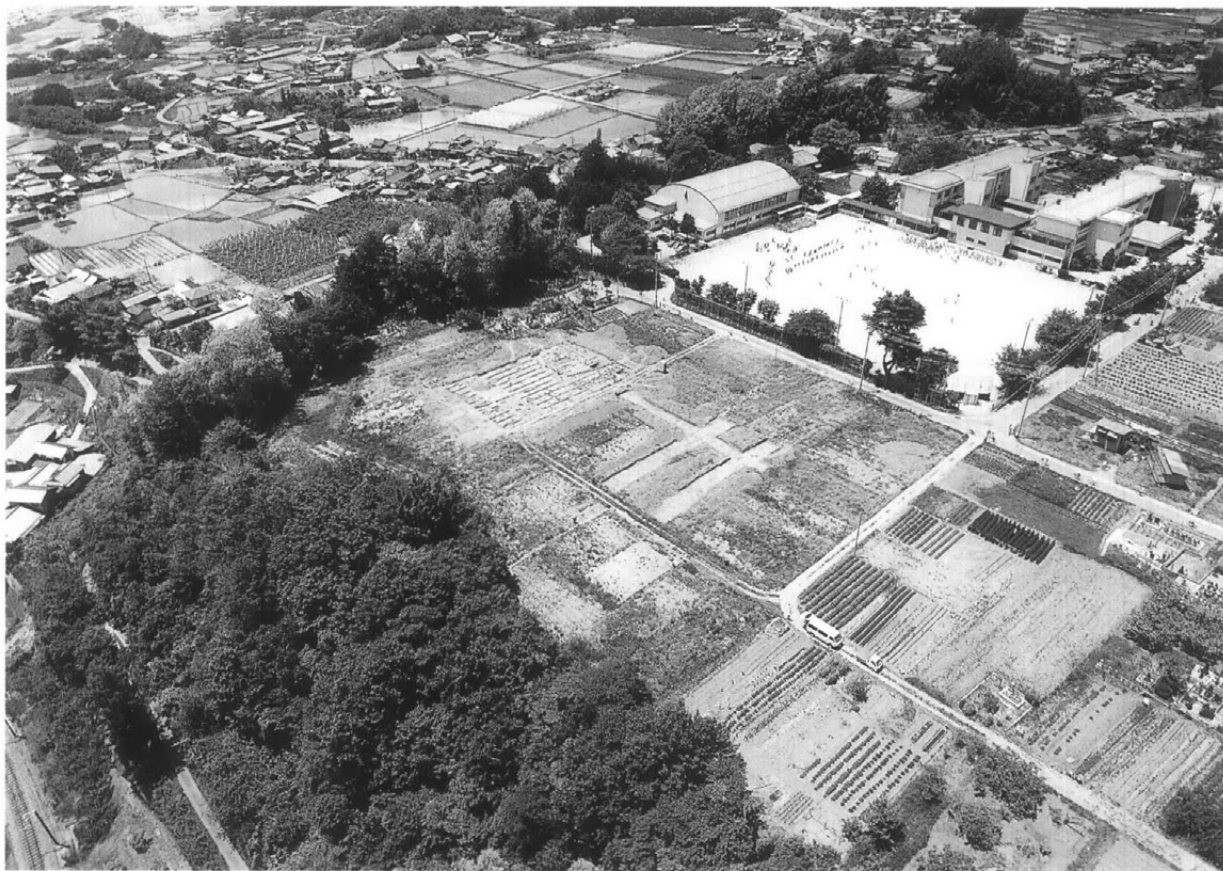


第12図 遺構外出土遺物



第13図 遺構外出土遺物

写真図版



調査区全景（空中写真）



調査区全景（空中写真）



調査前



調査区全景 南から



調査区全景 北から



SB31



SB31竈



SB31 P1 遺物出土状況



SB32



SB33



SB34



SB35



調査スナップ



調査スナップ



調査スタッフ

重機作業スナップ



基準点測量スナップ



空中写真撮影スナップ



報告書抄録

ふりがな	まえのはらいせきよん						
書名	前の原遺跡Ⅳ						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	吉川金利						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 TEL 0265-53-4545						
発行年月日	2002年1月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
まえのはら 前の原	いいだしきりばやし 飯田市桐林 503他	20205 210 竜29	35° 27′ 56″	137° 49′ 51″	平成12年 5月10日 から 平成12年 5月25日	712㎡	生涯学習 センター 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
前の原遺跡	集落址	縄文時代中期 平安時代 時期不明	竪穴住居址 1 竪穴住居址 1 竪穴住居址 3 土坑 3	1 1 3 3	縄文土器 縄文土器 土師器 須恵器		

前の原遺跡Ⅳ

調査報告書

2002年1月発行

編集・発行 長野県飯田市上郷3145番地

長野県飯田市教育委員会

印刷 有限会社飯田写真印刷

